
盗難車の末路

飯野こゆみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

盗難車の末路

【Nコード】

N5185E

【作者名】

飯野こゆみ

【あらすじ】

ある日とり忘れた車の鍵。 たったそれだけの事が私の人生を狂わせる。 盗まれてしまった車との偶然の再会は私の長い孤独との始まりだった。 冤罪？それとも・・・

盗難車の末路

私の実家は都会の喧騒とは程遠い閑静な田園風景の広がる田舎町。町内の誰もが知り合いで、最近越してきた人以外、昔から玄関に鍵も掛ける事を知らない、そんな犯罪からは一番遠いと思われていたところだった。

この田舎で育った私も例外ではなく、就職をし都会に出るまでは鍵の重要性さえ疑っていたのだが。

都心から電車で30分、都会の片隅とはいえ女の一人暮らし。鍵を掛けることの大切さをその当時付き合っていた彼に散々言われ習慣づいたのだが・・・

ゴールデンウィークの始まりの日私は迷う事無く私は自分の田舎へと帰る事にした。

就職して10年、幾人かの彼と過ごす事もあったが結婚には踏み切れず、ここまでできてしまった。

中にはそうになりたいと思った人もいるのだけれど、私の思う時期と彼の思う時期とはタイミングがずれ結局別れてしまったり。

今の彼とはもう2年にもなるが最近はずれ違いばかり、もう限界かもしれないと思っている。

このゴールデンウィークだって、2人の都合が合わずお互い別々の予定だ。

それで私は実家へと車を走らせていた。

自分の住む町から実家へは車で2時間半程、ドライブには少し遠いが、段々と見慣れた風景になってくるのは感慨もひとしおで。

もうこの車で何度往復したのだろう、そんな事を考えていた。

ゴールデンウィークには結婚した友人達も沢山里帰りする。

彼女たちの束の間休息。

普段は皆ばらばらの場所に住んでいる私達。

友人達もこの時とばかり子供達を実家の親に見てもらい夜通し話に花を咲かせる、そんな事をできるのもこちらに帰ってくる楽しみだった。

実家まであとほんの1キロのところまでやってきた。

国道から県道に入り、町に唯一のコンビニが目に入る。

ここに住んでいたころはよく来たものだ。

私は久し振りにこのコンビニに寄って見る事にした。

” おじさん元気かなあ ”

等と呑気なことを思いつつ車を駐車場へ。

あれほど都会へ出て鍵に敏感になってしまったのに、どうしてだろう？この田舎の雰囲気なのか、ここへ来るとそんな事はすっかり消え去ってしまい。

私はエンジンを切ったものの鍵を車に付けたまま店の中へと入ってしまった。

「おじさん久し振りっ」

「おお、美晴ちゃんじゃないか！元気そうだな」

そっとうおじさんは少しだけ小さくなってしまったようで、やっぱり

りここで商売するのは大変なのだろうそう思わざるをえなかった。

少しの閑談の後、数日過ごす為の必需品、雑誌にお菓子やいくつかの飲み物を買ひ

” おじさんまた来るねー ” と店をでたのだが

車を止めたはずのその場所は何もなかった。

何が起きたか全く解らず只呆然とその場に立つことしか出来ない私車が盗まれたと気がつくまで数分かかってしまった。

先程でた店にまた舞い戻り、おじさんに助けを求めた。

私よりも慌ててしまったおじさんは警察へ連絡してくれようと受話器をあげるも、間違つて消防へ掛けてしまつたりして、そんなおじさんをみて逆に私の方が冷静になれたようだった。

やがてやってきたお巡りさんに事情を説明し、盗難届けを出した。

その中で、最近はこちら辺も随分田畑を手放した人が多くてかなりの数の住宅が出来たとの事。元々の住民達も鍵を掛けないでいられる時代では無くなったのだと聞かされた。

盗む者が悪いのは当たり前だが鍵をつけたままの状態で車を離れた私にも落ち度があると言われ随分凹んでしまった。

おじさんかというと、終始申し訳なさそうな顔をして何度も頭を下げるのだった。

先ほども言われた通り、鍵を掛けずに車から離れてしまったのは私だとおじさんに言つてやつと解つてもらえたのだが、おじさんは送つてくれると引かずに結局実家まで送つてもらふ事にした。

本当はショックで堪らなかったけど、おじさんの前でそんな顔をす

ることも出来ず笑顔で話をしながら実家へと向かった。
おじさんは両親にも深々と頭を下げ帰って行った。

盗難車の末路（後書き）

難しいカテゴリーに挑戦してしまいました。一生懸命努力はしますが、無理のある設定もあるかも知れません。何かお気づきの事がございましたら言っただけだと幸いです。

盗難車の末路2

「ただいま。」

今更ながらに言ってみた。

手にはいつものボストンバックではなくさっきのコンビニの袋と手提げカバンのみ。

いつもだったら

”よく帰ってきたね。お帰り”となるはずなのだが

「全く、何やってんだか、この子は」と呆れ顔の母さん。

父さんだけが

「まあ、美晴が無事でよかったじゃないか。」

と私の肩をポンと叩き家へと導いてくれた。

部屋に入り、煎れて貰ったお茶で一息つく。

幸いな事に財布と貴重品は無事だったからそれだけでも良かったのかな。

でもあの服お気に入りだったのに。そんな事を呟くと

「服はまた買えばいいじゃないか。今は丁度休みなんだから少ししたら買い物に出掛けよう。」

父さんが言ってくれた。

優しい言葉に少しだけ涙腺が緩んでしまった。

出た時とまるつきり変わっていない私の部屋。
たまに帰ってくるので下着や洋服もいくつか置いてある。

でも車がねえ。

警察の人は物が物だけに直ぐに見つかりますよ。
ただ、無くなった状態かといえばその確立は低いかも知れませんが。
といわれてしまった。

もし、盗んだのが免許を持っていない奴だったりしたら何処かぶつけられていたり、最悪事故を起こした状態で発見されるかもしれない。

年季の入った車だけど愛着はある。

なんせ先月車検取ったばかりだし。

ただただ、犯罪にだけは使われないように願うばかりだった。

携帯で彼に電話するも向こうの電源が入っておらず、連絡がつかなかった。

私はメールで只一言

「車が盗まれた。」

と打った。

いくらすれ違っているても気がついたら返信してくれるだろう。
そう思っていた。

母さんに声をかけられ、一緒に買い物へ出る事になった。
家族で買い物なんて何年振りなんだろう。

ここに兄貴がいたら、良かったのに。

結婚して、兄貴は海外に転勤になった。

私が家をでて、兄貴まで海外なんて両親は何も言わないけれど、きつと寂しい思いをしているだろうといつも思っていた。

ここら辺は田舎だけに、子供と同居する家が多く隣の家も向いの家にもお孫さんがいる。みんな私の幼馴染の子供達だ。

おばさん達はみんな孫の面倒を見ていて口では大変だといいつつも嬉しそうなのは一目瞭然だったから。

孫を見させてあげられなくて申し訳ないな、とは思っけどこればかりはね。

どうしようもないから。

心の中で何度目かのごめんを言った。

結局警察からの連絡もなく、散々なゴールデンウィークの幕開けだった

盗難車の末路3

次の日の夕方、早紀、佳苗、里子、このいつもの面子で食事に出掛けた。

いつもの事なのだが、クラスメートの話だったり、昔の彼のその後などの話題で盛り上がったたり、話題はどんどん子供達の話や旦那、姑に移っていく。

始めは、そうなんだとばかりに頷いているのだが、所詮私は一人者で。

自然とソフトドリンクからお酒へと変わっていく。

上辺だけは

”聞いてるよ”と。

そうして、最後は誰かしらが

「美晴はいいよね。私、早まったかな？」なんて。

いつか、誰かに

「そんな事本気で思っても無いくせに！」
っていつてみたい。

とはいいつつも、彼女達と話すのはとても楽しかった。
会社で仮面をかぶっているような私はここでは本当の自分をさらけだせるのだから。

そうして、実家へ帰ってのんびりした日々を過ごす。
メールを送ってから既に3日。
彼からの連絡は全くなかった。

私のゴールデンウィークは終わってしまった。

田舎でリフレッシュするつもりだったのに
車を盗まれ、彼からの連絡もこないまますつきりしない連休明け。
おまけに未だに私の車の行方もわからないまま。

彼からのメールの返信がきたのは連休明け2日後

「見つかったか？」

ただそれだけだった。

もういい加減潮時だよな。

一人呟いてみるも、こんな彼でもいなくなるのは寂しいもので、最後の一言を言えないでいる。

その週末珍しく彼から電話があった。

電話から聞こえる声は優しく私をいたわるものだった。

車が無くなっても、美晴がいればいいじゃん。

彼はそう言った。

最後の一言を言わなくて良かった。

その時はそう思ったのだが、それがこの後私の人生を狂わせる大きな間違いだった。

彼は、先輩が丁度車を買ったので、今まで乗っていた車を譲ってくれると言ってるよ、と。

私の事を考えてくれていたのだと素直に嬉しく思った。

次の週末、車を譲り受けに行こうとまで言ってくれた。

それだけで十分だった。

始めは断ったのだが、やはりずっと車を持っていただけに、不自由な事も多く結局譲ってもらうことにした。

彼ははじめからそのつもりだったようで、週末という約束だったにも関わらず週半ばで車を貰ってきてくれた。

そして、来週にも直ぐに名義変更に行ってくれると言ってくれた。

保険だけは何かあったら怖いので直ぐにでも入ろうとしたんだけど、どうせ直ぐに名義変更に行くからそのままになってしまった。

今思えばここは私の第3ターニングポイントだったかもしれない。

勿論、第1は車の鍵を掛けなかった事

第2は彼と別れなかった事だろう。

そして、私の運命の日がやってきてしまった。

盗難車の末路4

車を持ってきてくれてから、また彼との連絡はぶつつりと途絶えたままだった。

その日も名義変更の件で彼に連絡するも電話は繋がらないまま。

ただそれだけだったらいいが、最近はい、2度コールすると電源が切れてしまったりするのだ。

電話の向こうは無機質な音声だけ。

仕事忙しいのかな？　と思う反面、私避けられてる？

そんな両極端な思いが駆け巡る。

やってはいけないと思いつつも私は夜のドライブに出かけてしまった。

そう、名義変更も保険も入っていない車で。

怖いなと思ったのは始めのうちだけで、走りだしたらそんなことは考えなくなってきた。

星空の綺麗な夜だった。

一人きりのドライブは快適で、少々古いがそれを除いては車も絶好調。

1時間程走った後、ふいに前方の車に目をやると、それは私の盗まれた車と同じ車種。

色も同じだった。

ただ違うのはナンバーだけだった。

「私の車はどこに行ってしまったんだろう？」

そんな事を考えていたら、信号が赤になったのに気がつかなかった。

あっ危ない！

そう思った時には既に遅く、前の車にぶつかっていた。

私は慌てて車を降り、前の車へと向かった。

運転席から出てきたのは男の人で、顔面をぶつけてしまったのか、顔を下に向け

「ちょっと、急いでいますので連絡してきます。」
と走って行ってしまった。

私は動転していて暫くそこに立ち尽くすも、いつまでたっても男の人は帰ってこなかった。

仕方なしに、自分の携帯から警察に電話をした。

こんな短期間に2度もお世話になるなんて。

さほどかからずに警察はやってきた。

そして、まだ男の人は戻って来ず。

免許証を提示して、事の次第を説明した。

ぶつけてしまった車から車検証を取り出すと、警察官の態度が一変した。

貴方の車です。

警察官はそう言った。

私は直ぐには理解が出来ず、もう一度聞きなおすも、返ってきた言

葉は同じだった。

よくみると、助手席にある煙草の焼け跡。それは彼がつけたそれと同じだった。

頭が混乱してきた。

私の車？

そして、警察官が潰れてしまったハッチバックを覗くと

そこには女の人の足が見えた。

ハッチバックをこじ開けよくみるとそこには息の絶えた女性がいた。

「この人は？」

「知りません。だから私はこの車に。」

必死になって説明するも名義は他人のもので。

そのうちに応援にきた警察官達に囲まれてしまった。

そして、車から女性が出されると。

中学の同級生康子だった。

「あっ」

小さく声を出し、顔を背けてしまった。

すかさず警察官が

「知っているんですね。」と

私は嘘もつけず

「はい。」と返事をした。

「警察に同行願います。」
それはとても冷たい声だった。

盗難車の末路5

そこはドラマで見るとような机と椅子以外何もない部屋だった。

私は取り調べを受けている。

実際、車をぶつけてしまったのは確かなのだが、肝心の被害者はとうとう現れなかった。

当たり前だろう、死体を運んでいたのだから。

事実は小説よりも奇なりと言ったものである。

「すると貴方は相田さん名義の車に乗って、自分名義の車に偶然衝突して、その自分名義の車にここから50キロ以上離れた中学の同級生がたまたま死体として遺棄されていたのですね」
警察の人が冷めた口調で私に確認をとる。

「はい。その通りです。」

フツと鼻で笑われた？

きつと私だってこの話が他人の話だったらその人が犯人だって思うと思う。

それ程条件は揃っていた。

康子、田所康子は小、中の同級生だった。

しかもそれだけではない、私は彼女に苛められていた。

切欠は些細な事だった。

中学の頃の康子の思い人が私を好きだったからだ。
執拗に私の中傷を続けた康子。

私よりも遙に容姿に自信のある康子はプライドが許せなかったのだろう。

仲間を巻き込んでのいじめは2年間も続いたのだった。

でも、その頃は早紀たちが一緒にいてくれたので対したダメージは受けなかったのだが、私が彼女に苛められていたと言う事は同郷の人たちは皆知っている。

この上なく私に不利な事実だった。

そして、刑事の更なる一言が私に決定的なダメージを与えた。

「先ほど、貴方の言う彼に会ってきたのですが、彼の婚約者と言う人がいましてね。貴方の事は困っている、一種のストーカーではないかというのです。」

私がストーカー？彼の婚約者？私には寝耳に水の話。
突然強い頭痛が襲いかかってきた。

追いつちを掛けるように刑事の口からでた言葉は

「早く本当の事を言って楽になりなさい。」だった。

最初から嘘は何一つ、ついていない。

何がどうなっているのか私には理解が出来なかった。

始めのうちは車をぶつけてしまったのは私だが、逃げる訳でもなく自分で通報した位だ。

ぶつけてしまった車が私のものであったとしても私は盗難届けを出しているのだし、直ぐに帰れる、そう思っていたのだが全く違った方向へと話は進んでいる。

警察は私に共犯者がいると思っっているらしい、おまけにストーカー疑惑だ。

車を譲ってくれた相田先輩とやらは実は結婚したばかりで海外へ新婚旅行へいつているとの事。

それにその相田さんと私は面識がない。

何より一番頼りにしていた彼には婚約者。

ここに来るまでは、今日の夕飯何食べようなどと呑気なことを考えていた自分が懐かしくもあった。

一体私はどうなるのだろう。

あんなに行きたくなかった会社の心配をしている自分にも気がついた。

また母さん呆れた顔してるだろうな。

この時はまだこんな余裕もあったのだった。

取調べは一日中続いた。

同じ事の繰り返し、何度説明しても話は堂々巡りだった。悔しくて悔しくて取調べの最中もずっと泣き通しだった。

そうして、私は逮捕されてしまった。

車の名義といい、康子の件といい偶然とはすまされないというそして、検察庁へと身柄を送られ検察官との接見が始まった。

盗難車の末路6

また一から説明した。

そこで新たに聞かれた事は

ゴールデンウィークに私が田舎へ帰った日にちだった。

答えられるのは全て答えた。

共犯者の事など、初めからいない人のこと等は答えられなかったのだが。

ここで、初めて弁護士という言葉が出てきた。

少し打ち解けられたのだろうか？検察官は国選弁護人を勧めてくれた。

真面目に10年以上働いてきた私にはいくらかの貯金もあるのだが・

なるべく今後のために取っておいた方が貴方の為かも知れないと。

3日後、早速弁護士がやってきた。

初老の男性だった。

優しい口調の弁護士に安心した。

山中というその弁護士は

「何度も何度も聞かれているかもしれないけれど、もう一度、全てを話して下さい。」
と言われた。

私が話し終えるのを静かに待っていた山中さんは

「信じていいですね。」

と一言。

「はい」

私は力強く頷いた。

「貴方は今とても不利な状態です、もし新たに思い出したことがあれば早めに私に連絡して下さい。頑張りましょう。」

ここにきて初めて少しただが光が差した。

山中弁護士はいろいろ調べてくれた中に彼に関するものいくつかあった。

彼の婚約者は会社の重役のお嬢さんだった。

私と彼は2年前会社関係の講習会で知り合った。

彼はライバル会社の社員で有った為、始めは挨拶する程度だったが、何度も一緒にテーブルにつくようになり、話すようになった。

話題が豊富で知的な彼は目立っていた。

そして何より、趣味の合う私達は次第に意気投合つるようになり付き合い始めた。

やはりライバル会社というのがネックで誰にも付き合っている事を言えなかった。

それは彼も同じだったと思う。

やっぱり初めから間違っていたのかもしれない。

山中弁護士にも、彼女はもう関係ないの一点張りで車の経緯など話してくれなかったようだ。

一方、私に車を譲ってくれた先輩も私の事を一切知らないのでも何も答えられないという。

誰だって殺人事件に関わりたくないのは当たり前だろう。ただ彼に車を譲ったことだけは話してくれたらしい。

それが彼の彼女だとは聞いていなかったとの言葉を添えて。

それから何日か過ぎ彼には婚約者の知り合いの弁護士が相談にのっているらしいとの話も聞いた。

私の存在自体の否定だった。

盗難車の末路7

その後彼と弁護士の間で話し合ったのだろうか。
やっと彼が口を開いたようだ。

私が元力ノだと言ったようだった。
無論私は別れ話をした覚えは全くないのだが。

私に懇願されて手切れ金がわりに、もう一切会わない条件で車を捜してやった。

と言い始めたらしい。

なんて男と付き合っていたのか。
やはりあの時別れていれば。

何度考えてもそこに辿りつく。
自分の決断力のなさ故なのだが。

そんなある日私に面会があった。
海外にいるはずの兄貴だった。

「兄貴。」
そう呟くともう枯れてしまったかと思った涙が知らぬうちに溢れてきた。

「兄さんに話してくれるな。」
優しい顔で微笑んでくれた。
ここへ来て初めてみた人の笑顔だった。

私は言葉足らずにならように注意しながら、何度も何度も話した話を兄貴に話した。
兄貴は

「そうだよな、兄さんは解っているから。それに父さんも母さんも」

そして、少し押し黙った後に

「ただな、母さんが随分落ち込んでいてな。暫く俺の所へ連れて行くと思うっている。」

そう言った。

今や私は殺人事件の容疑者となっている身。

父さんや母さんへの中傷は如何なるものなのだろう。

ここで初めて自分以外の人の心配をした。

なんて親不孝な子なんだろう。

また涙が溢れてきた。

あつという間に面会時間が終わってしまった。

最後に兄貴は絶対諦めちゃだめだぞ。

皆がついてるから。

そう言っただけで帰って行った。

そして、数日後今度は父さんが面会に来てくれた。

「美晴。」

そう言っただけで何も言わずにただただ涙を流す父。

会ったのはそんなに前じゃないのに父さんは一回りも二回りも小さくなってしまったように見えた。

「ごめんね、ごめんね。でも信じて。私何もやっていないから。」
其処までというのが精一杯で兄貴の時同様溢れる涙を抑えることは出

来なかった。

父さんは、保釈金を用意するとまで言ってくれた。年金暮らしでつましく暮らしていた父達にいくらだかは解らないがそんなお金まで出させるわけにいかない。

「大丈夫だよ、父さん。私だってやってないだもん。直ぐに出れるよ、日本の警察は優秀なんだから。」
自分に言い聞かせるように言い切った。

「でもな。でも、」
話を続ける父さんを遮った。

「私負けたくないから。康子を殺めてのさばってる奴がいるんだよ。私はやっていない。だから大丈夫だよ。」

ここに来て初めて微笑んだ。
父さん私、信じてもらえるように頑張るから。
そう思っ

後で聞いたのだが、この時は既に実家は売りに出されていて、買う人が現れるのを待つだけだったらしい。
しかし殺人事件の容疑者の家、誰一人として、名乗りを上げた人はいなかったそうだ。

そして、長い拘束期間も終わり、証拠不十分で不起訴になると信じて疑わなかった私に告げられた言葉は
「殺人容疑で起訴される」といったものだった。
私は被疑者から被告人になってしまった。
目の前が真っ暗になった。

追い討ちを掛けるように会社からの解雇通達もその頃同時に送られてきた。

これまでにない不安が一気にやってきた。
どうして?どうしてなの?

自答してみるも答えは出ない。

そうして、私の裁判の日程が決まった。

これから始まる長い長い戦いの幕開けだった。

盗難車の末路 8

裁判が始まるまでの間も取り調べは続けられた。

この時は既に接見禁止が出され、面会出来るのは山中弁護士ただ一人だった。

田舎から出て来てからは、一人でいる事を好むようになった。

無論、こちらでできた友人もいるのだが、地元の友人達のようにいつも一緒にいるような関係ではなかった。

彼にしてもそうだった。

束縛を好まない私は相手に対しても一歩置いた関係が多く、よく周りからは

「寂しくないの？」

と聞かれたものだ。

一人でも大丈夫。

それは、間違いだと言う事に気がついたのはここに来てから。

不安に押しつぶされそうで、誰一人として私を理解してくれないこの閉鎖された中にいると人恋しくなる。

父に会いたい

母に会いたい

私に大丈夫だからと笑いかけてくれる人に会いたい

そればかり考えていた。

時は過ぎとうとう裁判の日になった

緊張で昨晩は寝れなかった。

私の運命がこれで決まるのだ。

法廷に一步踏み入れる。

驚いたのは人人人。

空いている席は無いようだった。

そして、突き刺すような視線だった。

一番前の席には佳苗がいた。

参考人として呼ばれたのであろう。

私は目を合わせる事は出来なかった。

名前を言い、生年月日を言い裁判官の質問に次々と答えていった。
そして公判が始まった。

検察官からの質問にも、正直に答えていった。
そこで、1つ驚きの質問があった。

「貴方はゴールデンウィークに実家へ行きましたね。」

「はい」

「それは、何月何日ですか？」

「四月二十九日です。」

「その日ですが、誰か知っている人に会いましたか？」

「はい、両親に。」

「その他の人は？」

他の人と言われ考えてみる。

誰かに会っただろうか？

あつ

「コンビニのおじさんに会いました。」

「そうですね。加山宗助さんですね。その他には？」

考えてみるも思い当たる人はいない

「車が盗まれてしまったので、警察の方は呼びましたけれど他の知り合いにはあつてはいません。」

すると検察官が

「おかしいですね。こちらの調べではその日、田所康子さんに会っているはずなんですが。」

検察官の声に耳を疑った。

康子に会ってるって？

「会っていません。」

私は言い切った。

「そうですね、おかしいですね。彼女は貴方とコンビニで会ったことをある友人に話しています。洋服まで克明に覚えていましたね。これは貴方のご両親、ならびに狭山さんにも確認をとりました。会ってもいない人の洋服をこれほどまでに当てられることはあるのでしょうか？

貴方はコンビ二で田所さんと落ち合い、共謀して盗難車に見せる偽造をしたのではないですか？」

康子と共謀して盗難車に見せる偽装？どうしたらこんな発想が出てくるのか、思いもしない発言に戸惑ってしまった。

「異議あり、検察官は推測の話で被告人を動揺させています。」

「異議を認めましょう。検察官は推測で物事を進めないように。」

「解りました。では質問を変えましょう。貴方が田所さんに最後に会ったのはいつですか？」

康子に会ったのはいつだろうか？

高校は別だった。

はつきり言って覚えていなかった。町で会ったとしても話す事など無かったのだから。

「覚えていませんが、卒業した後は話をした事もないと思います。本来だったら在学中だって話をしなかったのだが」

「もうひとつ、これは貴方にとったら辛い質問かもしれませんが、貴方は中学の時、田所さんに2年間近く苛められていたと言っのは本当ですか？」

「はい、本当です。」

「それを今まで根に持っていたのではないですか？」

さっきは共謀といい、今度は……一つ呼吸をし

「いいえ、考えた事は有りません。もう忘れたい過去ですから。」
きつぱりと答えた。

「ほーそれでは、忘れられ無いほど嫌な思いをされたと。」

どうしてこう揚げ足をとるような事をいうのだろう。

「確かに苛めは受けましたが、私には友人がいましたから、大丈夫でした。彼女にはもうどうこうするきも全くありませんでしたから。ただ会いたくなかっただけですから」

あれだけ緊張していたのに、意外に受け答えの出来る自分に驚いた。それは、自分はやっていないという事実があつたからだ。

この裁判さえ終われば家に帰れる。

そう思っていたからだと自分自身に納得をした。

盗難車の末路9

その後も検察官の執拗な質問が続いた。

傍聴席からは、舌うちをする人もいて私の心を乱し始める。

そんな中、検察官が参考人と言いだした。

検察側の参考人、それは思いもしない人物。

傍聴席の最列に座る、佳苗だった。

なぜ、なぜ佳苗が？

少しだけあった余裕が無くなった瞬間だった。

背中からは汗がたりりと伝うのを感じ、手も汗ばんできた。

弁護士ではなく検察官の参考人？

突然膝の力も抜けて、全身の血の気が引いたようだった。

意識が遠くなりそうな私に、まるで遠くから聞こえるようなエコーのかかった佳苗の声が私の頭にこだました。

「はい、確かに田所さんから聞きました。あの日美晴に会った事を」

何を言っているの佳苗。私は康子になんか会っていない。

立ち上がって、そう反論したいのに全身が脈を打っているように身体がいう事を聞かない。

膝に力がいらないければ、声さえ上げる事も出来ない私がいた。

誰の声も耳に入る事は無くなっていた。

「立ちなさい」

そんな声と共に身体を揺すられている事に気がついた。

両腕を抱えられ、証言台にやっとの思いで立った私に検察官のいやらしい声が浴びせられる。

「どうです、石沢佳苗さんの証言を聞いて間違いはありませんか？」

間違いって、間違いしかないわよ。

だって私、康子に会っていないのだから。

「私は、康子に、田所さんに会っていません」

か細い声しか出なかった。そんな私に検察官は

「随分と動揺されているようですね」

人の感情をここまで逆なでられる声があるなんて。

私はどうしたらいいのか、解らずというか何が起きたのか全く分からなかった。

途端に胸が苦しくなり、右手で服をわし掴みにした。

段々と呼吸も苦しくなってきたとうとう膝をついてしまった。

山中さんが私の背中に手を当てて裁判官に声を掛けてくれた。

暫しの間の後

「30分間の休廷をします」

という裁判長の声が法廷に響き渡った。

「大丈夫かい？ 美晴ちゃん」

どこまでも優しい声だった。

盗難車の末路 10

私は刑務官に両脇を抱えられ、山中弁護士と共に、小さな部屋に入れた。

壁際にある椅子に腰かけさせてもらうと、少しだけ動悸がおさまったような気がした。

「大丈夫かい？」

「先生」

私と山中弁護士の声が重なった。

「私、私本当にあの日」

そう言いかけた私に

「大丈夫だよ、分かっているから」

と山中弁護士は背中をさすってくれた。

その優しい声に涙がにじんだ。

でも泣いてはいけしないと必死で堪えて天井を仰ぐ。

きつと今この涙が零れたら私は壊れてしまいかもしれない。

父と母の顔を思い浮かべて、すっかりなくてはと何度も自分に言い聞かせた。

「私はやっていない」

「私はやましい事は何もしていない」

私の言葉に

「分かっているから」

と山中弁護士は背中をさすり続けてくれた。

少し落ち着いた私は、最初の一言に衝撃を受けて、それ以降の佳苗の証言が耳に入っていない事を山中弁護士に告げた。
山中弁護士はゆっくりと聞かせてくれた。

地元で結婚した佳苗は、待ちを出て行った同級生とはたまにしか会わなかったのだが、一番頻繁に地元に戻ってくる康子に数年前から偶然会うようになった事。以前のわだかまりが消えて、連絡を取り合うようになり、康子が地元に戻る時にはお茶をする仲になっていた事を告げられた。そんな話は初耳だった。今まで一度だってそんな話……

「きつと、以前の美晴さんとの関係を知っているだけに話辛かったんだろう」

と山中弁護士はそういった。

それにしたって……

「そう、あの日、美晴さんが地元に帰省した日も田所さんから電話があつて、近くの喫茶店でお茶を飲んだそうだ。『さっきね、コンビ二の前で美晴に会ったのよ』そういつて美晴さんの話を佳苗さんに聞かせたらしい。悪口とは違って、美晴さんの服装を見て高そうな服だったとか、都会の女って感じでカッコ良くなったよねとそんな話をしたそうだよ」

嘘、私は康子になんか会っていない。

あのコンビ二だって誰もいなかった。

もう何が何だか分からない事だらけだった。

頭を抱えて沈み込む私に

「大丈夫だよ、真実は一つだから」
山中弁護士はそう言ってくれた。

大丈夫だよ

それは山中弁護士の口癖なのだろう。だけどその言葉でどれ程私が救われているか分からない。

「頑張ります」

そういつて私は顔をあげた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5185e/>

盗難車の末路

2010年10月8日22時10分発行